

日本語と諸言語の指示語の対照について  
— インドネシア語・韓国語・中国語と —

**Comparison of Demonstratives Between Japanese and Other Three Languages  
(Indonesian, Korean, Chinese)**

金井勇人<sup>i</sup>, 金善花<sup>ii</sup>, ジョセップ・プラウイタ<sup>iii</sup>

KANAI Hayato, Jin Shanhua, Josep Prawita

(要旨)

本稿では、日本語の指示語と3言語の指示語との対照を行う。指示語について言えば、従来、日本語と他の外国語との「2言語の対照研究」は広く行われてきたが、4言語を取り上げているものは、管見の限りでは多くない。なぜ4言語を取り上げるのか。諸言語には、コソアのような3系列を持つ言語と、“this-that”のような2系列を持つ言語がある。3系列として日本語と韓国語を、2系列としてインドネシア語と中国語を取り上げる。このように複数の言語を取り上げることで、2系列と3系列との相違点、2系列同士、または3系列同士の相違点などを、浮き彫りにすることができる。このような考察は、日本語学習における指示語の誤用を防ぐヒントを与えてくれるだろう。

キーワード：日本語学習，指示語，誤用，対照分析，母語干渉

## 0. はじめに

世界の言語には、日本語の「コソア」のように3系列の指示語を持つタイプと、英語の“this-that”のように2系列の指示語を持つタイプが存在する。Fillmore(1982)は、以下のように述べている。

(1) Demonstratives ... may have a two-step or a three-step distance contrast. The two contrasting systems were represented as

[+Proximal]:[-Proximal]

[Proximal]:[Medial]:[Distal]

The Medial category in a three-step system has ‘short distance from Speaker’ and ‘close to Hearer’ as the two elements of its semantic prototype. (Fillmore1982:55)

Fillmore(1982)が述べているように、これらはいくまで“prototype”である。本稿では、3系列の言語として日本語と韓国語を取り上げるが、両言語の指示語体系は、大きな共通点を持ちながら、細部では相違点も見られる。2系列の言語として取り上げるインドネシア語と中国語との関係も同様である。

本稿では、まずは諸言語の指示語体系を対照して、prototype から“はみ出ている”部分に焦点を当てていく。その結果は、日本語学習における指示語の誤用を防ぐヒントを与えてくれる、と考えられる。

<sup>i</sup> 埼玉大学国際交流センター助教

<sup>ii</sup> 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程2年生

<sup>iii</sup> 埼玉大学日本語日本文化研修留学修了生

## 1. 日本語の指示語

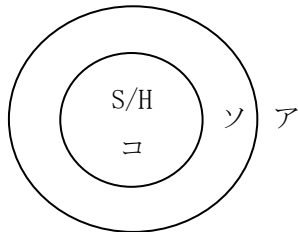
### 1-1 現場指示

日本語の指示語は、コソアの3系列から構成される。そして、距離区分型と人称区分型という2つの型があり、それぞれにおいて、コソアの機能も異なってくる。

距離区分型では、話し手と聞き手が同じ領域にいて、その[直示の中心]から近い順に、コ(近称)、ソ(中称)、ア(遠称)で指すことになる。

(図1)

距離区分型



S=話し手, H=聞き手

例えば、指示対象の「本」を「これ」「それ」「あれ」で指すとする(書店で)。

- (2) ちょっと、これ、見てよ。(これ=本)
- (3) ちょっと、それ、面白そうだね。(それ=本)
- (4) ちょっと、あれ、なんて書いてあるの。(あれ=本)

(2)の「本」は、話し手と聞き手の領域にある。(4)の「本」は、両者から遠く離れた領域にある。(3)の「本」は、コ(近称)で指すには遠いが、ア(遠称)で指すには近い、という中間の領域にある。

ただし、聞き手が存在しない場合(すなわち独り言)では、ソ(中称)は使用されない。コ(近称)とア(遠称)の2項対立となる。

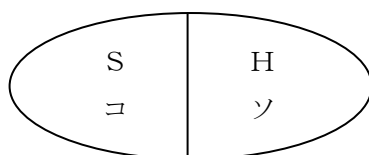
- (5) (独り言。電車内で、向かいの座席に置いてある箱を指して)  
これ/\*それ/あれは何だろう。

向かいの座席にある「箱」をソ(中称)で指すことはできないため、話し手は「箱」を、コ(近称)か、ア(遠称)で指すことになる。<sup>iv</sup>

一方、人称区分型では、話し手と聞き手が空間的・心理的に対立しており、話し手から見て自分の領域をコ、聞き手の領域をソで指すことになる。

(図2)

人称区分型



S=話し手, H=聞き手

<sup>iv</sup> 中距離の領域が成立するためには、参与者として“話し手と聞き手の双方が必要”なのだと考えられる。この問題自体は重要だが、本稿の主旨からは逸れるので、ここでは指摘するにとどめたい。

例えば、指示対象を「本」であるとした場合、

- (6) A：この本，昨日買ったんだけど，とても面白いよ。  
B：本当？ ちょっとその本，見せて。

「本」はAの領域に存在する。このときAは、話し手（A）の領域にある「本」を、コで指す。一方、Bは、聞き手（A）の領域にある「本」をソで指すことになる。

## 1-2 文脈指示

文脈指示では、前方照応・後方照応・記憶指示の3つについて述べたい。前方照応とは、前文脈においてすでに述べられた先行詞を指す用法である。

- (7) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。この／その／\*あの友だちは、ストレスがたまる  
と、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。(留学生の作文)

第2文の「友だち」は、第1文の先行詞「友だち」と照応している。このとき「この／その」は使用可能であるが、「あの」は非文となる。

コを使用したときは、直示のように、指示対象が目前にあるかのようなニュアンスを醸し出す。一方、ソを使用したときは、そのようなニュアンスがなく、純粹な文脈照応であると言える。

また、アは記憶内にある対象を指す（記憶指示）という用法を持つ。

ただし、(7)の話し手は「友だち」を知っているが、聞き手が当該の「友だち」を知らないので、「あの」は使用できない。つまり、話し手が聞き手の知識レベルに合わせる、ということである。これは、聞き手の知識に配慮した〔語用論的制約〕と言える。例えば、

- (8) A：この間、一緒に行ったレストラン，おいしかったね。  
B：そうだね。あのレストラン，また一緒に行こうね。

のように、聞き手（A）が知っていることが前提となっている場合、話し手（B）は、記憶指示アを用いることができるのである。<sup>v</sup>

また、独り言の場合には、聞き手への配慮は必要でない。

- (9) そう言えば、あれは、どこにしまったかなあ。(独り言。思い出して…)

---

<sup>v</sup> 学習者には、文脈指示における【ソ→ア】の誤用が多い（注x参照）。その一因として、この〔語用論的制約〕の理解が難しい、ということも挙げられるだろう。例えば、

A：テレビで何度も放送していたのに、君はあの事件を知らないのか。

B：すみません、最近、ニュースを見てなくて…。

のような会話の場合、聞き手（B）は「事件」のことを知らない。それにもかかわらず、話し手（A）は、聞き手（B）への配慮をしていないので、ア系の指示語で「事件」を指している。このようなアが自然で、(7)のようなアが不自然であるというのは、取りも直さず、語用論的配慮の有無によるわけだが、学習者には両者の判別は容易ではない、と考えられる。

次に後方照応であるが、これは後の文脈で述べられるものを、先に指しておく、という用法である。

- (10) 私にはこんな/\*そんな/\*あんな友だちがいます。ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりする友だちです。

後方照応では、(10)から分かるように、コしか使用できない。これは、あたかも「友だち」が眼前にいるかのように表現することで、成立する用法である。

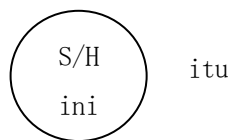
以上、日本語の指示語の用法を、現場指示と文脈指示とに分けて概観した。次章以降では、日本語と対照しつつ、諸言語（インドネシア語・韓国語・中国語）における指示語の性質を、見ていくことにする。

## 2. インドネシア語

### 2-1 現場指示

インドネシア語の指示語は、基本的に ini と itu の2系列である。<sup>vi</sup> この体系を、日本語の距離区分型の図式で表すとすると、図3のようになる。

(図3) 距離区分型



この場合、ini が近称で、日本語のコに相当する。また、itu は遠称で、日本語のアに相当する。中称は存在せず、遠称に包含される。

正保(1990)では、インドネシア語の ini と itu の使い分けについて、次のように述べられている。

- (11) インドネシア語の指示代名詞の選択の基準は、専ら話し手からの主観的な距離の遠近に置かれ、日本語の場合のように、聞き手に属すると意識される領域に近いかどうかということとは無関係にその選択がなされる。即ち、自己の縄張りに属するとみなす領域内にあるものは、ini で指示され、自己の縄張りの領域外にあるものとみなす領域内にあるものは itu で指示される。(正保 1990:48)

ここから、インドネシア語の ini と itu は、日本語と同じ人称区分型を構成するのではない、ということが分かる。例えば、聞き手の近くにある対象であっても、話し手からも近いと認識されれば、ini によって指すことになる。

(聞き手の近くにある「かばん」を指して…。ただし「かばん」は、話し手からも近い)

- (12) そのかばん、外国製でしょう？

(12)' Tas ini, produksi luar negeri, kan.

(tas=かばん)

<sup>vi</sup> ただしインドネシア語では、場所を表すときは3系列となる（近称=sini, 中称=situ, 遠称=sana）。本稿では、場所を表す用法には触れないこととする。

日本語では、聞き手の領域であることが優先されて、「その」が用いられる。一方で、インドネシア語では、話し手の領域であることが優先されて、ini が用いられることになる。

ただし、指示語の選択の基準が「専ら話し手からの主観的な距離の遠近」に置かれる、というのは、注意を要する。例えば、次のような場面では一見、ini が選ばれることが予想される。

(13) (AとBとの距離は非常に近い。AはBのネクタイに触れていない)

A : \*この/そのネクタイ, とても素敵ですね。

B : どうもありがとう。

このとき、日本語では人称区分型のシステムによって指示語が選択される。したがって、聞き手の領域を表すソ (そのネクタイ) が選ばれる。上記の正保(1990)の説明を“素直に”受け取れば、インドネシア語では、このとき、ini が選ばれるはずである。

しかし、インドネシア語では、このような場面では ini が使えず、itu が選ばれる。

(13)' Dasi \*ini/itu, keren sekali ya.

Terima kasih.

(dasi=ネクタイ)

(13)' のような場面で ini を使えないということは、何を意味するか。

それはつまり、指示語の選択の基準が「専ら話し手からの主観的な距離の遠近」によるのではあるけれども、そこには聞き手の存在が多分に影響している、ということである。

とは言え、itu が積極的に使える、というわけでもない。

(14) あなたのネクタイ, とても素敵ですね。

(14)' Dasi kamu keren sekali ya.

(kamu=あなたの)

「kamu (あなたの)」と言う方が自然である。これは言うまでもなく、itu が遠い領域を指すという性質を持っているからである。(13)' では、“話し手と聞き手との距離が非常に近い”という設定をしてあるために、itu は使えるけれども使いにくい。

この“itu は使いにくい”という事実は、非常に重要なポイントである。なぜならば、2系列の指示語体系として、ini=近称/itu=遠称、という役割分担(すなわち距離区分型)が、(13)' のような場面でも、決して崩れていない、ということが窺えるからである。

それでは、itu が使える条件とは何だろうか。ただ単に聞き手に近い、という対象は、話し手から近距離であれば ini で指示する。これは、正保(1990)の指摘通りである。

しかし、(13)' の dasi (ネクタイ) の例も含め、聞き手が身に付けているような対象については、itu が用いられることになる。

ネクタイ、眼鏡、携帯電話、洋服、靴、口紅、ピアス、ひげ、現在食べているもの、腕時計、…これらを聞き手が身につけている場合には、itu が選択される (ini は使えない)。

通常、3系列の指示語の場合、真ん中に当たる指示語 (コソアならばソ) が、聞き手の領域を指すことに

なる。<sup>vii</sup>

一方、2系列の指示語の場合、[遠近] で使い分けが行われることになり、聞き手の領域を“専ら”指すという指示語は存在しない。

しかしながら、これはプロトタイプであり、2系列の指示語でも、インドネシア語の(13)' の itu のように、ある条件下では、聞き手の領域を指すように思われる用法が存在する。

インドネシア語の場合、聞き手が身に付けている対象は、“心理的に遠い存在”として認識されるのだと考えられる。(13)' で itu が使いにくいというのは、[心理的には遠い→itu] が、[空間的には近い→ini] から、であるだろう。そのため、第三の選択肢として「あなたの (kamu)」が選ばれる。

しかし、ini が絶対に使われないのに対して、itu は使われ得るということは、[心理的な遠さ]の方が[空間的な近さ]より優先されている、ということの意味する。したがって、(13)' のような場合、臨時的に“至近距離の聞き手の領域を指す” itu が成立することになる。<sup>viii</sup>

中国語は、インドネシア語と同じく、2系列の指示語体系を持つが、聞き手が身に付けている対象でも、話し手から至近距離にあれば、近称で指すことになる。同じ2系列の指示語であっても、どのような対象を“心理的に遠い”と認識するのかにおいて、インドネシア語と中国語は性質を異にするのである。

## 2-2 文脈指示

### 2-2-1 前方照応

まず、前方照応について検討したい。日本語においてソで受けるとき、インドネシア語では itu で受けることになる。

(15) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。その友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

(15)' Temanku sangat stress.

Temanku itu kalau stress naik turun tangga apartemen untuk olah raga.

(teman=友だち, ku=私の)

ここから、インドネシア語においては、前方照応は itu によって行われる、ということが分かる。それでは、日本語のコによる前方照応に対応する用法はあるだろうか。

(16) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。この友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

コによる前方照応では、その現場に「友だち」が実際に存在するわけではないが、あたかも存在するような臨場感がある。これは明らかに、現場指示のコの直示的な性質を受け継いでいる。

<sup>vii</sup> 日本語は3系列の指示語を持つ言語であるが、この定義から漏れていない。つまり、コ=[Proximal], ソ=[Medial], ア=[Distal]であって、かつMedialの指示語「ソ」は、“話し手から少し遠い”という素性と“聞き手に近い”という素性の2つを持っている。

<sup>viii</sup> 注viで述べたように、インドネシア語では場所を表すときは3系列となる(近称=sini, 中称=situ, 遠称=sana)。推測の域を出ないが、「situ」には「itu」という形態が含まれていることから、ituは、もう少し積極的な意味で聞き手の領域を指せるのかもしれない。この点、今後の調査に委ねたい。

この(16)における「この」を、インドネシア語では、ini に置き換えることはできない。このことから、インドネシア語の“前方照応は itu に限られる”ということが分かる。<sup>ix</sup> すなわちインドネシア語では、ini の直示性よりも、itu の「前方照応性」の方が優先される、ということが分かる。

ここに、日本語のコと、インドネシア語の ini との間の、大きな相違がみられる。日本語では、コ の直示性よりソの「前方照応性」が優先される、ということはない。

## 2-2-2 後方照応

インドネシア語における後方照応は、ini によって行われる。

(17) 私にはこんな/\*そんな/\*あんな友だちがいます。ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりする友だちです。

このときインドネシア語では、ini が使われる。

(17)' Saya punya teman yang seperti ini/\*itu.

Teman yang naik turun tangga apartemen untuk olahraga kalau stres.

(teman=友だち)

前節で見たように、インドネシア語においては、

(18) ini の直示性よりも、itu の「前方照応性」の方が優先される。

という原則が働いているものと思われる。

しかしながら、(17)' のような例では、前文脈に teman が登場しないので、(18)の原則が働かない。そのため、直示性を持つ ini が選択されるのである、と考えられる。

## 2-2-3 記憶指示

インドネシア語において、記憶指示は itu によって行われる。

(19) A : この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。

B : そうだね。あのレストラン、また一緒に行こうね。

このとき、Bの記憶の中に「レストラン」があり、それを指すために、Aが選ばれる。インドネシア語では、次のように itu で指される。

(19)' A : Restoran yang waktu ini pergi bersama, enak ya.

B : Ya. Kapan-kapan pergi bersama ke restoran itu lagi ya.

(restoran=レストラン)

---

<sup>ix</sup> この言語事実は、田尻・ダヒディ(2004:210)による「すでに述べられたある具体物を示す指示代名詞は、ini ではなく itu を使わなければならない」という記述と合致する。

遠称の“距離的に遠い”という感覚が、記憶の中を指す（時間的に遠い）、という感覚と共通している。ただし中称は存在しないので、日本語のように“聞き手の知識レベルに配慮する”という〔語用論的制約〕も存在しない（注v参照）。

独り言でも、記憶指示は遠称の *itu* によって行われる。

(20) そう言えば、あれは、どこにしまったかなあ。（独り言。思い出して…）

(20)' Oh iya, (yang) itu, aku simpan di mana ya?

次に、日本語学習者のソとアの誤用を見たい。他言語の母語話者にも見られるが、インドネシア語の話者にも、次のようなソとアの混用が見られる。<sup>x</sup>

(21) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。\*あの友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下ったりしています。

このような誤用は、なぜ起きるのだろうか。

(表1)

	現場指示			文脈指示		
	近	中	遠	前方照応	後方照応	記憶指示
日本語	コ	ソ	ア	ソ/コ	コ	ア
インドネシア語	ini	itu		itu	ini	itu

基本的に、現場指示の遠称と、文脈指示の記憶指示は、同じ形態（日本語で言えばア、インドネシア語で言えば *itu*）で表示される。

問題は、現場指示における *itu* の指示範囲が、現場指示におけるアの指示範囲とは異なる、ということである。つまり、現場指示における中称のソと遠称のアを合わせた範囲が、*itu* の指示範囲である。

したがって、現場指示における【*itu*=ソ or ア】という対応が、そのまま文脈指示にも“写像される”のだと考えられる。

すなわち、(21)では「友だち」という先行詞が現れているので、その先行詞「友だち」は *itu* で指されるものと了解される。

それが、そのまま前方照応のソに移行すれば誤用は発生しないわけだが、ここで【*itu*=ソ or ア】という現場指示からの“干渉”が発生する可能性がある。

その結果、先行詞「友だち」をアで指す可能性が生じて、(21)の「あの友達」のような誤用が生まれるのだと考えられる。このような誤用パターンは、基本的には、2系列の指示語を持つ他言語の話者においても見られるものであるだろう。

<sup>x</sup> 迫田(1996)では、指示語の習得についての調査をまとめて「母語の違いにかかわらず、最も頻度の高い誤用パターンはソ系を使用すべき場合にア系を使用する「ソ→ア」の誤用であり、習得が進んでもあまり減少しなかった」と述べられている。(迫田 1996:73)



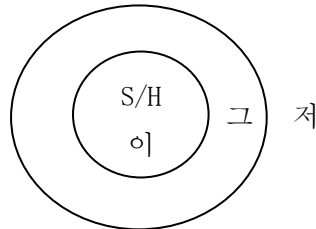
### 3. 韓国語

#### 3-1 現場指示

韓国語の指示語は, 이 (イ)・그 (グ)・저 (ゾ) の3系列から構成される。そして日本語と同じく, 距離区分型と人称区分型という2つの型があり, それぞれに, 이 (イ)・그 (グ)・저 (ゾ) の機能も異なる。

距離区分型では, 이 (イ, 近称), 그 (グ, 中称), 저 (ゾ, 遠称) となる。

(図4) 韓国語の距離区分型



S = 話し手, H = 聞き手

ただし, 日本語と同様, 聞き手が存在しない場合 (独り言) は, 그 (グ, 中称) が使用できず, 이 (イ, 近称), 저 (ゾ, 遠称) の2項対立となる。<sup>xi</sup>

距離区分型において, 日本語と韓国語が大きく違うのは, 中称のソと그 (グ) の指示範囲である。例えば次のような場合には, 日本語では中称のソを用いる。

(22) (タクシーに乗った客が運転手に)

「そこのレンガ色の建物の前で止めてくれ」(正保 1981:69)

このとき, 韓国語では, 中称の그 (グ) ではなく, 遠称の저 (ゾ) で指すことになる。

(22)' 「저기 빨간 벽돌색 건물앞에서 세워주세요」

(저기=あそこ, 건물=建物)

このような観察から, 宋(1991:141-142)のような「コ系の範囲と이系の範囲が大体同じであるし, ソ系とア系を合わせた範囲と저系の範囲が大体同じであると言えよう」といった, 中称의 (グ) は存在しない, という考え方が生じてくる。

ところが, 話し手と聞き手から指示対象までの距離が, 比較的近い場面では, 日本語で中称のソを用いるところで, 韓国語でも中称의 (グ) を用いることになる。

(23) (AとBは, 同じテーブルに並んで座りながら, 食事をしている)

A : その塩, 取ってくれないかな。

B : はい, どうぞ。

(23)' A : 그 소금을 주시겠어요.

B : 예, 드세요.

(그=その, 소금=塩)

<sup>xi</sup> 「この用法 (筆者注; 距離区分型の独り言) にはソ系の指示形式が現れない。韓国語の場合も全く同様に, いわゆるソ系に当たる의系は現れない」(宋 1991:10)

このような観察から、金(2006)は、宋(1991)のような考え方に反論している。

- (24) …のような対照研究では、日本語においては「中距離のソ」系が認められるが、韓国語の場合は「聞き手の領域に属するゴ」系があるのみで、「中距離のゴ」系の用法はないとされている。しかし…実際の発話場面では韓国語においても中距離指示用法は観察される。(金 2006:52)

このことから金(2006)は、「韓国語のゴ系で以って指示できる空間は、話し手を中心にピンポイント的に狭い範囲内の地点である(金 2006:57)」と結論している。

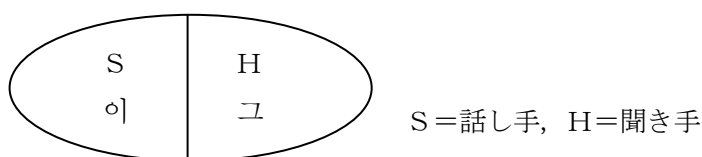
以上から、中称のゴ(グ)が成立する条件は、話し手と聞き手から指示対象までの距離が比較的近くて、話し手と聞き手との距離が大きな意味を持つこと、と分かる。

逆に言えば、(22)’のような場面では、話し手と聞き手(タクシーの運転手と客)から指示対象(レンガ色の建物)までの距離が遠いために、話し手と聞き手との距離は“ゼロ”と見なされる(無視される)。このようなとき、中称のゴ(グ)は使えず、遠称の저(ゾ)を用いなければならない。

この点が、距離区分型における、日本語と韓国語の大きな違いである、と言えるだろう。

一方、人称区分型も、基本的に日本語と同様である。つまり、距離区分型における近称(이)が話し手の領域を指し、中称(그)が聞き手の領域を指すことになる。

(図5) 韓国語の人称区分型



例えば、話し手が聞き手のネクタイを指すときには、그(グ)が使用される。

- (25) A : そのネクタイ, とても素敵ですね。  
B : どうもありがとう。

- (25)’ A : 그 넥타이 아주 멋집니다.  
B : 감사합니다.  
(그=その, 넥타이=ネクタイ)

(25)では、「このネクタイ」と言うことも不可能ではない。ただしその場合は、話し手が聞き手のネクタイに触れている、というように、対象が話し手の領域内にある、という“強い”根拠がなければならない。

このことは韓国語でも同じである。(25)’において「그 넥타이 (そのネクタイ)」ではなく、「이 넥타이 (このネクタイ)」と言える場合、話し手が「ネクタイ」に触れているなどして、それが話し手自身の領域にある、という“強い”根拠が必要となる。

### 3-2 文脈指示

文脈指示について、まず前方照応から見ていきたい。

- (26) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。この/その/\*あの友だちはストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下ったりしています。

第1文に現れる「友だち」を指すとき、韓国語では、이 (イ)・그 (グ) を使うことができる。이 (イ) を使うと、日本語のコと同じく、あたかも指示対象が眼前にあるように感じられる。一方、그 (グ) を使うと、日本語のソと同じく、単に前文に出てきた語と照応しているだけであり、純粋な文脈指示と言える。<sup>xii</sup> さらに, 저 (ゾ) を使うことはできない。この点についても、日本語と同様である。

- (26)' 저의 친구는 스트레스가 아주 많습니다.

이/그/\*저친구는 스트레스가 쌓이면 아파트의 계단을 오르락 내리락하며 운동을 합니다.  
(친구=友だち)

しかし、記憶指示において、聞き手が指示対象を知っていても、やはり話し手は저 (ゾ) が使えず、この点において、日本語のアとは大きく異なっている。

- (27) A : この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。  
B : そうだね。あのレストラン、また一緒に行こうね。

このとき、A・Bの記憶内には「レストラン」が存在する。したがって、Bは「レストラン」を「あの」で指すことになる。この日本語の体系を当てはめれば、(27)の「あの」は、韓国語では저 (ゾ) になるはずである。しかし、このような場合には、그 (グ) が用いられる。

- (27)' A : 며칠전에 함께 갔던 레스토랑 맛있었죠.  
B : 그래요. 우리 나중에 그 레스토랑에 또 가요.  
(레스토랑=レストラン)

(27)(27)' では、話し手と聞き手による対話の例を見たが、話し手による独り言でも、やはり그 (グ) が使われる。

- (28) そう言えば、あれは、どこにしまったかなあ。(独り言。思い出して…)  
(28)' 그걸 어디에 치웠었지.

<sup>xii</sup> ただし、「現場にある物でも一度言語的文脈に登場させたら、韓国語では中称の그系で指すことが可能である」(迫田 1997:68)。このような場合、日本語では、直示のコ系かア系が優先される。この点において、日本語と韓国語の指示語は異なっている。また、この事実は、インドネシア語における

(18) ini の直示性よりも、itu の「前方照応性」の方が優先される。という原則とも似通った側面を持っていて、그と itu の共通性が垣間見えるようで、非常に興味深い。

以上から、韓国語において記憶内の対象を指す指示語は，저 (ゾ) ではなく，그 (グ) であるということが分かる。すなわち，韓国語の그 (グ) のカバーする範囲は，日本語のソとアの両方に跨るわけである。<sup>xiii</sup> それでは，記憶指示には，絶対に저 (ゾ) は使われないのだろうか。

金(2006:108)では，「あの輝かしい百済の文化！」のような「百科事典的知識であり，具体的には歴史上有名な人物や文化遺産に関する知識」である場合には，저 (ゾ) で指せる，と述べている。

ここで重要なのは，やはり韓国語も，記憶指示に遠称を用いることがあり得ること，つまり3系列を維持している，ということである。ただし，その指示範囲が，見落とされるほど極端に狭いだけである。

このことは，韓国語の저 (ゾ) が記憶指示に使われるための「語用論的制約」が，日本語のアの場合よりも厳しい，ということの意味する。

日本語では，話し手の“聞き手も知っているだろう”という見込みさえあれば，記憶指示のアが成立してしまう。一方，韓国語では，「百科事典的知識」のような“誰もが必ず知っているはずのこと”でなければ，記憶指示の저 (ゾ) は成立しないのである。

次に，後方照応について見てみたい。

(29) 私にはこんな/\*そんな/\*あんな友だちがいます。ストレスがたまると，運動のために，アパートの階段を上ったり下りたりする友だちです。

日本語の後方照応では，専らコが使われる。このことは，韓国語において専ら이 (イ) が使われることと並行的である。

(29)' 저에게는 이런/\*그런/\*저런친구가 있습니다.  
스트레스가 쌓이면 아파트의 계단을 오르락내리락하며 운동을 하는 친구입니다.  
(친구=友だち)

以上の観察から，文脈指示における日韓対照を表にまとめてみたい。

(表2)

	現場指示			文脈指示		
	近	中	遠	前方照応	後方照応	記憶指示
日本語	コ	ソ	ア	ソ/コ	コ	ア
韓国語	이 (イ)	그 (グ)	저 (ゾ)	그 (グ) / 이 (イ)	이 (イ)	그 (グ)

ここから，文脈指示の部分だけを取り出してみると，次のように表せる。

(表3)

	直示的な前方照応	純粹な前方照応	記憶指示
日本語	コ	ソ	ア
韓国語	이 (イ)	그 (グ)	그 (グ)

<sup>xiii</sup> 「日本語のア系指示詞の領域において中称の그系が多用され，韓国語の文脈指示用法では그系の汎用性が高いと言える」(迫田 1997:68)。

表3からも分かるように、韓国語のコ(グ)は、純粋な前方照応としての用法と、記憶指示としての用法に跨っていて、日本語が前者をソ、後者をアで使い分けていることとは著しい対照を成す。このことも(21)のような【ソ→ア】の誤用の原因となり得るだろう。<sup>xiv</sup>

(21) (=再掲)

私の友だちは、とてもストレスがたまっています。\*あの友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

また対(ゾ)は、多くの場合には現場指示の遠距離を表すのみで、日本語のアと比べると、カバーする範囲が非常に狭いのが特徴と言えるだろう。

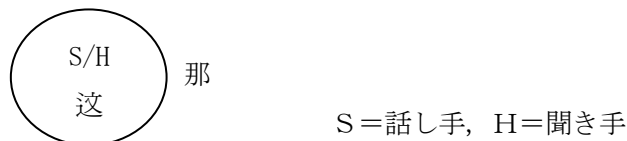
## 4. 中国語

### 4-1 現場指示

中国語の指示語は、这(zhe)・那(na)の2系列から構成される。これらも、日本語の指示語と対照するために、距離区分型と人称区分型という2つの型に分けてみたい。

距離区分型では、それぞれ、这(zhe, 近称)、那(na, 遠称)となる。

(図6) 中国語の距離区分型



一方、人称区分型は、基本的には2系列のインドネシア語と同様である。すなわち、距離区分型における近称(这, zhe)が話し手の領域を指し、遠称(那, na)が聞き手の領域を指すことになる。

日本語では、話し手と聞き手の距離が近くても、当該の指示対象が聞き手の領域にあると認識されれば、聞き手を指す「ソ」が使用される。

しかし中国語では、専ら話し手からの距離に基づいて、指示語が選択される。つまり、指示対象が聞き手の近くにあっても、話し手から近いと認識されれば、遠称(那)ではなく、近称(这)が使用されるわけである。

(30) (聞き手の近くに置いてある「かばん」を指して。ただし、その「かばん」は話し手からも近い)

日本語：そのかばん、外国製でしょう？

中国語：这包儿是外国产的吧？

(包=かばん)

<sup>xiv</sup> その他、【ソ→ア】の誤用について、迫田(2001)は、次のような原因を挙げている。

彼ら(筆者注；日本語学習者)の中でのソとアの使い分けは、…(中略)…接続する名詞に影響されている可能性が考えられる。つまり、「人・先生」などの具体的名詞にはア系指示詞が選択され、「こと・感じ」などの抽象名詞にはソ系指示詞が選択されるのではないか…。(迫田 2001:21)

この指摘に従えば、(21)の誤用(あの友だち)の原因の1つとして、「友だち」が具体的名詞であるから、ソではなく、アが選ばれた、ということになる。

日本語では、聞き手の領域が優先されるので、聞き手の領域を表す「ソ」が選択されることになる。

一方、中国語では、話し手の領域しか考慮されないために、話し手が自身に近いと認識した場合、遠称の「那」ではなく、近称の「这」が選ばれる。

日本語の場合、(30)において、話し手が「このかばん、外国製でしょう？」と言うためには、「かばん」を触っているなどして、明らかに話し手の領域にあることを主張する“強い”根拠がなければならない。

一方、中国語では、(30)において、話し手が当該の「かばん」を触っていなくても、話し手から近い、と認識されるだけで、近称の「这」が選ばれる。

さらに、指示対象を聞き手が身に付けているような場合でさえも、やはり話し手からの距離に基づいて、指示語が選択される。

(31) (AとBとの距離は非常に近い。Bが身に付けているネクタイを指して…)

A：そのネクタイ、とても素敵ですね。

B：どうもありがとう。

(31)' A：这个领带很漂亮。(领带=ネクタイ)

B：谢谢。

聞き手が身に付けているものでさえ、話し手から近いと認識されれば、近称の「这」が使用される。このことは、中国語では基本的に聞き手の影響を受けない、ということの意味する。<sup>xv</sup>

このように考えると、「那」は、やはり2系列のインドネシア語と同じく、本来的な意味として「聞き手の領域を指す」という意味を持っているわけではない、ということが分かる。<sup>xvi</sup>

通常は、【話し手から遠い距離】≒【聞き手から近い距離】という場面が多いからこそ、それに伴って、聞き手の領域にあるものを「那」で指すことが多い、というのに過ぎない。

したがって、中国語(およびインドネシア語)の「人称区分型」は、あくまで“語用論的な型”であり、文法的には「距離区分型」が援用されたものに過ぎない。

<sup>xv</sup> ただし、木村(1992:189)は、聞き手が持つモノを遠称の「那」で指す例を挙げている。

(話し手が至近距離にいる彦市の持ち物を指して)

(日) 彦市どん、そら何な?

(中) 彦市、你那是什么呀?

なぜ、話し手から近い「彦市の持ち物」を遠称の「那」で指すのか。木村(1992)は、次のように説明している。

もとより、対象の正体が明らかでないに、それが相手の領域に属するものであるという認識が重なり、そこに心理的な疎外感が生じて、遠称による指示が促されたということだろう。(木村 1992:189)

ただし、このことは、中国語の指示語の用法において聞き手の領域を認める、ということではない。中国語では、指示詞の選択を決定するのは、自分と対象との間に感じられる物理的・心理的な遠近感であって、相手の存在は、この遠近の認識に影響を与える一要因であるにすぎない。その意味で、中国語の指示詞の運用はあくまでも自己中心的であると言えるだろう。(木村 1992:191)

この点で、日本語のソや韓国語のユのように、指示語の用法において聞き手の領域を認めるという性質は、中国語の遠称「那」には存在しない、と考えられる。だからこそ、上の例文に見られるように「你」を前接させることによって、「那」の指示範囲中の「あなた」の領域、という限定をしなければならないのである。

<sup>xvi</sup> ただし、対話の相手自身が指示対象になる場合には、近称の「这」が用いられる。それは、

“你”(あなた)の領域を“我(わたし)”の領域に取り込み、包み込んだ“咱们”(われわれ)の視点、言わば抱合的視点(木村 1992:190)

が採用されるから、である。

ここで、中国語とインドネシア語との対照を試みてみたい。

(13) (=再掲) (AとBとの距離は非常に近い。AはBのネクタイに触れていない)

A : \*この/そのネクタイ, とても素敵ですね。

B : どうもありがとう。

(13)' (=再掲)

Dasi \*ini/itu, keren sekali ya.

Terima kasih.

(dasi=ネクタイ)

このとき、近称の ini は使えず、遠称の itu を使う、ということであった。ただし、itu であっても使いづらいのは、(13)' におけるAとBとの距離が近いからである。

しかしながら、(13)' において itu が使えることの意義は大きい。つまり、インドネシア語においては、聞き手が身に付けている対象について、話し手は“心理的に遠い”対象として認識する、ということの意味するからである。

一方、中国語では、聞き手が身に付けている対象であっても、それを“心理的に遠い”とは認識しない。そのような条件に加えて、「対象の正体が明らかでない(木村1992:189)」等の要因が重なって初めて、遠い存在として認識されるのである。

(表4)

	至近距離の聞き手の領域にある対象を遠称で指せる要因	その根拠
インドネシア語	聞き手が身に付けている	話し手からの
中国語	聞き手が身に付けている ∧ その正体が明らかでない	心理的な遠さ

日本語・韓国語では、専ら聞き手の領域を指す指示語(ソ・ユ)が存在する。したがって、話し手からの至近距離であっても、聞き手の領域にある対象は、それらによって指すことができる。

一方、インドネシア語・中国語では、専ら聞き手の領域を指す、という指示語が存在しない。したがって話し手から至近距離である場合、たとえ聞き手の領域であっても、話し手からの主観的な遠近感に基づいて近称(ini・这)で指すことになる。

しかしながら、ある条件が整えば、至近距離の聞き手の領域であっても、遠称(itu・那)で指すことができる。そのとき、[心理的な遠さ]が[距離的な遠さ]に見立てられるのは、両言語に共通している。

ただし、表4からも分かるように、インドネシア語の方が、対象が“心理的に遠い”と認識されるための条件が緩い。それに比べて、中国語の方は、その条件が厳しいのである。

同じ2系列の指示語であっても、“心理的に遠い領域”の認識の仕方が異なっているために、このような相違点が生まれることになるのである。

#### 4-2 文脈指示

まずは、前方照応について検討したい。日本語において「ソ」で受けるとき、中国語では、遠称の「那」で受ける。

(32) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。その友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

(32)' 我有一个朋友精神压力很大。

那个朋友一有压力，就爬公寓的楼梯，爬上爬下做运动。

(朋友=友だち)

ただし、日本語では前方照応のコ、中国語では前方照応の「这」も可能である。

(33) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。この友だちは、ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。

(33)' 我有一个朋友精神压力很大。

这个朋友一有压力，就爬公寓的楼梯，爬上爬下做运动。

(朋友=友だち)

コや「这」を選んだ場合は、あたかも指示対象が眼前にあるかのように指す、というニュアンスになる。

次に、後方照応について見る。日本語における後方照応には、近称のコが用いられる。中国語の後方照応も、近称の「这」によって行われる。

(34) 私にはこんな／\*そんな／\*あんな友だちがいます。ストレスがたまると、運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりする友だちです。

(34)' 我有一个这样的／\*那样的朋友。一有压力，就爬公寓的楼梯，爬上爬下做运动。

(朋友=ともだち)

最後に、記憶指示について、検討する。記憶内の対象を指すときには、遠称の「那」が選択される。

(35) A：この間、一緒に行ったレストラン，おいしかったね。

B：そうだね。あのレストラン，また一緒に行こうね。

(35)' A：上次咱们一起去的西餐厅，很好吃。

B：是啊，以后再去那家西餐厅吧。

(西餐厅=レストラン)

木村(1992:198)は、「日本語における記憶指示では、「その節」のような慣用句的なものを除けば、すべて遠称の「ア」が用いられるが、中国語でもやはり“那”が用いられる」と述べている。



また、中国語では中称が存在しない。したがって、インドネシア語と同じく、日本語のソとアの使い分けに見られるような〔語用論的制約〕も存在しないことになる。

記憶指示を、遠称の「那」で行うということは、独り言でも同様である。

(36) そう言えば、あれは、どこにしまったかなあ。(独り言。思い出して…)

(36)' 对了，那个 (东西)，我放那里来着。

記憶内の対象を、現場指示の遠称の指示語で指す、ということは、日本語のア、インドネシア語の itu、中国語の「那」に共通している。それは、“時間的に遠い”という感覚が“距離的に遠い”という感覚と共通するからである。

この点においては、韓国語で記憶指示に中称のゴ (グ) を使う、ということが有標的である、ということが分かる。<sup>xvii</sup>

## 5. おわりに

本稿では、日本語とインドネシア語・韓国語・中国語という、4言語の指示語の対照を行った。世界の諸言語には、3系列の指示語と2系列の指示語を持つものがある。3系列の代表として日本語・韓国語を取り上げ、2系列の代表としてインドネシア語・中国語を取り上げた。

このように、4言語を扱うことによって、3系列と2系列の相違点、3系列同士の相違点、2系列同士の相違点などを洗い出すことが可能となった。

例えば、Fillmore (1982) も述べているように、3系列の指示語体系では、距離区分を基準にすれば近称／中称／遠称を持ち、人称区分では近称が話し手の領域／中称が聞き手の領域を指す。

一方、2系列の指示語体系では、距離区分を基準にすれば近称／遠称を持ち、人称区分では近称が話し手の領域／遠称が聞き手の領域を指す。

ただし、これはプロトタイプであり、3系列にも、2系列にも様々なバリエーションが存在する。

本稿で扱った全てを挙げることはできないが、例えば同じ3系列でも、記憶指示においては、日本語では遠称のアが使われるのに対して、韓国語では基本的に中称のゴ (グ) が使われる。韓国語の遠称の対 (ゾ) が記憶指示に使われないことはないが、その適用範囲は極端に狭い。

また同じ2系列でも、現場指示において指示対象が話し手から近い場合、インドネシア語では、その対象を聞き手が身に付けていれば、それは“心理的に遠い”と認識され、遠称の itu が使われ得る。

これに対して中国語では、そのような場合でも、近称の「这」が用いられる。遠称の「那」が使われないことはないが、その条件として、話し手にとって指示対象の正体が不明であるといった、さらに“心理的な遠さ”が強調される要因がなければならない。

このように、3系列と2系列の指示語の相違点、3系列同士、2系列同士の相違点を、分析しておくことは、日本語教育において、指示語の誤用を防ぐためのヒントとなるもの、と考えられる。

本稿では、主として【ソ→ア】の誤用の原因について分析を行ったが、指示語体系の全体を見渡せたものと考えている。他の個別の詳細な分析については、稿を改めて論じることにはしたい。

---

<sup>xvii</sup> 3-2において見たように、記憶指示に遠称の対 (ゾ) が使えないわけではないが、その適用範囲は、無視され得るほどに狭い。

## 参考文献

- 木村英樹(1992)「中国語指示詞の「遠近」対立について－「コソア」との対照を兼ねて」『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版, pp. 181-211
- 金善美(2006)『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房
- 迫田久美子(1996)「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程－対話調査による縦断的研究に基づいて－」『日本語教育』89, pp. 64-75
- 迫田久美子(1997)「中国語話者における指示詞コソアの言語転移」『広島大学日本語教育学科紀要』7, pp. 63-72
- 迫田久美子(2001)「学習者独自の文法」『日本語学習者の文法習得』pp. 3-23, 大修館書店
- 正保勇(1981)「「コソア」の体系」『日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞』pp. 51-122, 国立国語研究所
- 正保勇(1990)「インドネシア語の指示詞－日本語との比較を通して観た－」『日本語学』9-3, pp. 48-58, 明治書院
- 宋晩翼(1991)「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究－「コ・ソ・ア」と「이・그・저」との用法について－」『日本語教育』75, pp. 136-152
- 田尻英三・ダヒディアフマッド(2004)「インドネシア語の指示語」『国文学解釈と鑑賞』69-7, pp. 207-212, 至文堂
- Fillmore, Charles J. (1982) "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis," Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 31-59, John Wiley & Sons Ltd.

---

本稿は科学研究費補助金(2009年度～2010年度, 若手研究(スタートアップ)→研究活動スタート支援, 「指示語の誤用を防ぐための諸言語との対照分析」研究課題番号: 21820005, 研究代表者: 金井勇人)による研究の成果の一部である。